

追憶の頁

一戸玲太郎

1

公孫樹の梢に白い月が浮く午後である。

裏背戸の黍の葉蔭で盗んだキス。

紅らむ頬よ。襟足のほつれ毛よ。

野莓が影うつす小川には水すましが群れて跳んでゐた。

彼女は櫓垣きざりに凭れ、「おたつしやでー」と。

ああ私の馬車は動く。行手にひろがる青田よ。

涙ぐむ眼にあてた前垂には桔梗の花がゆれてゐた。

2

土手に咲き盛る野薔薇の上を飛ぶ黄金の虻よ。

青空の下のはるかなる稲田よ。

白い塵を蹴立てて一隊の生徒が歩いて来る、
帽章の輝き。紅玉の頬頬。ああその胸の清らかな泉！

丈高き白楊の梢に囁く微風よ。

その新緑の葉が身をゆすりて密かにする微笑よ。

芝草に寝ね眼を閉ぢる私は、

荒野の果、山を越えてゆくあの白雲か。

3

小川は吹き、つぶやき銀色に流れ、

熊笹の上を紋白蝶がもつれて翔んでゐる。

崖の上の枯れ芝に坐る私の軽い疲れ。

梨の皮を剝く君の水々しい手よ。

未だ耕されぬ田に侏儒の森、そのなかの赤き鳥居。

白雲は雪斑らの山脈を徐ろに翳らせてゆく……

ああ髪の色。紫の眼よ。

朗らかなこの時、君よその優しき唇を興へてよ……

4

紫の霧が人の群をおだやかに包み、

柳の葉がくれに街燈が琥珀のごとく輝いてゐる。

ゆたかな黒髪。桃のような頬。

あなたはつつきしく歩いてゆく。

わたしらの想は微風にもつれ、そして流れ去る。

ふと熱い手がふれる。水に映る陽炎よ。

蜜の沈黙……

星星が金色の酒を滴らせてゐる。

ああ、わたしの胸に涌いてくるこのやさしさ、なつかしさは。

ポブラの梢に黄色い葉が閃めき踊る。

甘々しい光が青空に流れ、

教會堂の塔に黄金の鐘が輝いてゐる。

あなたは花束のようにわたしに凭れてゐた。

すみれ色の睫毛。優しい呼吸。

あなたの唇のうへに蜀葵が燃え、

藤色の長い袖が朝の濱邊のように霞む……

朗らかに鳴りわたる鐘。

と俄かに目を開けて微笑したあなたよ。

櫛が青畳に落ちその飾がきらめいてゐた。